

第33回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



詩情あふれる世界を表現した 世界的銅版画家

みなみ けいこ
南 桂子 (1911~2004)

南桂子は、明治44年（1911）2月12日、富山県射水郡下関村（現高岡市中川）の大地主の三女として生まれた。幼少期に両親を亡くし、親族によって育てられた。昭和3年（1928）、富山県立高岡高等女学校（旧富山県立高岡西高校・現富山県立高岡高校）を卒業。同年5月に行われた開校20周年記念展覧会に卒業生として油彩画を出品した。女学校在学中から絵画制作への興味が膨らんでいたことがうかがえる。

昭和20年（1945）、芸術への思いから家族とともに上京。すぐに女流画家の集まりである「朱葉会」に入会した。その後「自由美術家協会」の洋画家、森芳雄に油絵を学ぶようになった。また、新聞に童話を投稿するなど芸術作品を通して自立して生活しようと模索した時期でもあった。昭和24年（1949）、第13回自由美術展に油彩画「抒情詩」を出品。その後、のちに夫となる版画家の浜口陽三と出会った。浜口の影響を受け、昭和28年の自由美術展には最も早い時期の銅版画「目を奪られた女（めをとられた女?）」「幻想」を出品した。

昭和29年（1954）にフランスに渡り、陽三と暮らした。40歳を過ぎてから銅版画の世界に魅せられ、版画家ジョニー・フリードランドの版画研究所で銅版画を精力的に学んだ。この頃の作品には、女性・魚・きつね・鳥などのモチーフが見られ、昭和31年（1956）には、「風景」という作品がフランス国民教育省に買い上げられるなど、海外で認められるようになった。さらに、「羊飼いの少女」がニューヨーク近代美術館のクリスマスカードに、「平和の木」がユニセフのグリーティングカードに、「子供と花束と犬」がユニセフのカレンダーに採用され、海外での評価をさらに高めた。南の作品はパリの画廊のカタログにミロやピカソと並んで掲載されるまでになった。この頃のモチーフは、少女・鳥・お城などが多く、線が細かく表現され、構図が洗練され、南らしい独自の世界がこの頃から生まれている。

昭和40年代、その繊細な色遣いや見方によって様々なことを想像できる南の作品は、日本でも高く評価され、多くの雑誌の特集や表紙を飾った。昭和45年（1970）に出版された谷川俊太郎の詩集「うつむく青年」では、ペン画による挿絵や装画を手がけた。

昭和57年（1982）、パリを離れサンフランシスコに転居。70歳を超えていたが作品制作を続けた。同年には東京の帝国ホテルの全客室に南の銅版画が飾られ、また、同ホテルの情報誌の創刊号から13号まで連続してその作品が表紙を飾った。平成8年（1996）に日本に帰国。同10年（1998）、「ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション」が開館し、南の作品が所蔵された。高岡市美術館、富山県美術館、黒部市美術館をはじめ国内に所蔵館は複数ある。平成16年（2004）、都内で死去。晩年、「女学校に通う道すがら、毎日見ていた川の水面がキラキラと光って綺麗だったのを覚えている」と故郷を振り返っている。93歳であった。

<専門員 星野 貴昭>



浜口陽三と南桂子 パリのアトリエにて 1978年



「羊飼いの少女」



「子供と花束と犬」

協力：ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション